玉子王子　著

一章　風呂場でパパの玉を責める娘たち

　勝ち組。

　文字通りのそれと藤枝は思っていた。

　小中高一貫していじめられ、それでも勉強を続けて名門大学に入った。

　サークルに入るでもなく、ただ勉強して卒業。

　そして一流会社に入り、美人の妻をもらい、かわいい娘三人に恵まれた。

　――俺の人生は社会人からだ。

　二六で結婚し、今四六歳。

　娘は一番上が一九で大学、一人暮らし。

　幸い、変な虫もつかず、これといった反抗期もなく、下の娘二人ともども家族仲はいい。

　会社と、家族サービスだけの人生だ。

　それで十分以上に幸せだった。

　薄っぺらい人生といえば全くその通り。しかし小学校でガキ大将、中学でヤンキー、高校でバンド、大学でも遊びまくり、就職に失敗してヤクザ崩れというような**波乱万丈の人生**よりはるかにいいと思っていた。

「パパー、お風呂入ろう」

「あ、私も」

　下の娘八歳でも割と「そろそろ無理かな」と思える年齢だというのに、上の一四歳の娘まで普通に風呂に入るというのだ。

　これ以上の幸せなどないだろう。

　一三で脱童貞した人間であっても、今現在娘に嫌われている人間より自分のほうが幸せと藤枝は本気で思えた。

　まあ別に大した友人もいないので、いつ童貞を捨てたかなどという話はしたこともない。

　ちなみに藤枝の場合は妻と付き合いだして少ししてからだ。

　妻は美人ながら処女であり、これも相当ラッキーだったと藤枝は思っている。

　三人で風呂に入る。

　そろそろ腹も出てきた藤枝と比べ、一四の娘はサッカー部なので引き締まった体ながら、巨乳の妻に似てかなり胸も出ている。

「あ、パパまたお姉ちゃんのオッパイ見てる」

「成長してきたかなーって」

「パパが成長したらサッカーしちゃうよー」

ちらり、と父の股間を見る次女。

ぶらぶらと揺れる巨棒。かなりの大物だ。妻とする段になって、普通のゴムが入らないことで巨根と気づいた。

「っていうか、パパのすっごい大きいよねえ」

「そんなことないよ」

腰を左右に振り、ぶらぶらと揺する。

「ぎゃはは、パパの大きいー！」

胸より腹が出ている幼女体型の三女が手を叩く。

いい気になって揺すりつつ、気づく。

「大きいって、誰と比べて？」

三女は適当に姉に合わせているのだろう。

問題は次女だ。

思わず直球で聞いたが、早まったかと思わないでもない。

しかし、次女はことも何気に答える。

「男子サッカー部の生意気な奴脱がせたんだ。二股とかかける奴でさー、でもこの子の同級生ぐらいで」

「へえ……」

――いやいや何やってんだマナカ。男子脱がせるとか。あ、しかもモモミの同級生のと同じって、

そっちも見てるのか。

「あ、パパ変なこと考えてない？　おしっこしたいっていうから、持ってあげただけだよ。……でも持ってあげたら、成長しちゃった」

「成長って何？」

「大きくなるってことよ」

「なんで大きくなるの？」

「元気だからかなあ」

風呂は広い、格闘できるほどだ。昔はよく妻と格闘した。

いや、今も結構している。

――いかん、こんなこと考えてたら成長しちまう。

娘二人の前で**ギン立ち**はまずい。隠せるサイズではないし、そもそも丸出しでは相当な極小でなければ立てば一目瞭然だ。

気を落ちつけつつ、椅子に座る。

モモミと洗いっこだ。

次女は鏡に向かって座り、自分で洗う。むっちりした桃尻に目を奪われる。

――ナナコと同じだ。やっぱり母娘だなあ。いやいかんいかん。

せっかくの中学の娘との親子風呂が、**ギン立ちで終了**では辛い。

「はい、次は前ですよ」

「はいはい」

小さな手が胸や脇の下、腹を洗う。さらに下も。

「いや、そこは」

「やだ、ここが楽しいの！　ママにもお姉ちゃんにもないところだから！」

「それじゃ仕方ないなあ」

「毎回言ってんじゃんそれ」

苦笑する次女。

毎回言っているから、というだけで笑っているのではない、もともとは姉が「ママにはないところだから」といい始めたのだ。それを彼女が受け継ぎ、さらに三女が受け継いだ。

さらに、妻ナナコとの**夜の格闘時**にも「娘たちにはないところだから」などとネタにされる始末だ。

妻や娘らに男の部分をネタにされて大事に洗われる日々。

これが幸せでなくて何だろうか。

次女は妻とのことはともかく、姉や妹との繋がりにおかしさを覚えているのだろう。

幼女の小さな手が父の巨棒を撫でまわす。洗うのも手コキも大して違う動きではない。

――くうう、たまらん。もし俺がロリコンならもう相手が娘だろうがギン立ちだろうな。これでも立ちそうなんだから。実際、ミナホの時は結構ギン立ちだったからな……ナナコに「パパのおチン〇ンこんなになっちゃった」とか報告されて、割と冷たい目で見られた……懐かしいな。今の俺は抑えられる。

竿を洗い終わると、肉玉のほうだ。袋にずっしりと収まった鶏卵以上の傑物。妻が「リンゴ大」と

いってくれるのが誇らしい巨玉。

　それを重そうに両手で持ち上げつつ、ちらっと顔を見上げてくるモモミ。

「ん、どうした？」

「今日ねえ、部活始めたんだ、空手なんだけど」

「へえ、モモミなら強くなれるよ」

「うふふ、上級生の男の子に相手してもらったんだけどね、「女じゃあんまり強くなれない」とかいう人だったんだ」

「ひどいなあ」

「あは、でもそれ聞いてた女の子の先輩がね、その人と組手して、簡単に勝っちゃったんだ」

　ニマ、とほほ笑む。

　微笑みつつ、ギュッと手を握る。

「ここ、攻撃して」

「え」

「やだ、玉蹴り？」

「そ！　タマタマ攻撃！」

　ムニムニと、握ったその男特有の臓器を揉む幼女。

　唾を飲む藤枝。

　――ちょ、なんか居心地悪……別にこの子が俺の玉攻撃してくるわけもないけど、何か……俺だけにあって、この子らにはない急所の話ししながら、そこ揉まれるのは不安で……

「あは、パパちょっとビビってない？」

「えー？　なんで？　モモミパパのタマタマには何もしないよ？」

「も、もちろんわかってるよ」

　キュ、と肉玉が引き締まるが、温められて揉まれているので縮み上がりはしない。

　と、動きに目ざとく気づくモモミ。

「あ、パパのタマタマちょっと動いた。引き締まった感じ」

「やっぱビビってんじゃん！　モモミ、男って怖がる時にね、縮んじゃうのよ、き・ん・の・た・ま。おチン〇ンも。まあパパのは縮んでもでっかいからわからないかもねえ」

「パパのチン〇ンってなんで大きいの？」

「男らしいからよ、ねえパパ」

「そ、そうだよ」

「パパは強ーい、男の人で、チン〇ンも大きいし、私たち女の子なんて全然敵わないんだ。でも……モモミが握ってるそこ狙ったときだけ別なんだよねー」

「そうなのパパ？　パパも先輩みたいに「はぐっ！」とかいって腰引いて変な動きしちゃうの？」

「あは、こうでしょ？」

　立ち上がる次女。

　何もない股間を押さえ、素早く引く。顔を引きつらせながら。

「あがっ！」

「きゃはは！　そうそう！　女の子の先輩たちが、男の子の先輩たちにタマタマキック入れるたびに、男の先輩たちそんな感じになってたよ！」

「股間だけは弱いんだよね、男の人は。ねえパパ？　パパたち男の人には、私たち女の子にはない……コーガン、付いてるもんね、二個！」

「な……」

　発言もさることながら、何もない股間の前に指でリングを二つ作り、これ見よがしに男性器の形を示す次女に絶句する。

「マ、マナカやめなさいそんなかっこ」

「それじゃ、こうかな？　これ、普通の人、これ、パパ」

　指一本下にピッと伸ばしてから、両手で幅を作って見せる。

「きゃー、パパだパパだ！」

「長さはこのぐらいね」

「ロングだロングだ！　パパのはロングだ！」

　笑ながら、揉むのはやめない。

　と、蚊。

　風呂の中に入り込んでいたそれがモモミの前を横切る。

「あっ」

「はぐっ」

　ペン、と蚊を叩こうと手を振ったモモミ。その手は彼女の故郷ともいうべき父の肉玉をプルンと弾いていた。

「きゃは！　タマタマがプルンプルン」

「え？　ちょっとモモミ何してんの？」

「は、はぐうううう」

股間を押さえ、頭を下げる。

「あれ？　パパ頭洗う？」

突き出され、首をかしげるモモミ。

噴き出すマナカ。

「ぷっ、ちょ、パパもしかして、お急所？　モモミ何したの？」

「蚊を叩いただけだよ、手がちょっとタマタマにも当たった。プルンって」

「モモミ、一本」

「え？」

「もうパパは動けません。モモミの勝利」

「えー？　きゃは、どういうこと？　あ、そうだタマタマ弱いんだった。でも、あんなの別にどうでもいいでしょ？　ねえパパ」

「う、うん……何ともないよ」

「いや動けないじゃん！　よくわかんないけど、パパ今男の人特有の事情で全然動けないんでしょ？　声震えてるし、汗も噴き出してる」

「わ、ほんとだ！　パパ、そんなにおキ〇タマ痛いの？」

「い、いや……全然平気」

「文字通りの震え声いただきました！」

「うっそー、パパ、本当に動けないの？　今ので？　ぺしっていっただけだよ？」

　目を見張り、それを輝かせる全裸幼女。

　その横で、肩を叩く姉。

「ぺし、で死亡するのが男の急所、おキンキンなの。力じゃママや私たち三人まとめてもパパには敵わないけど、お股に当たればモモミ一人の軽ーい攻撃でもパパはＫＯ。なぜならパパには……これが付いているので」

　妹の前に腰を突き出し、またもリング二つで**睾丸しぐさ**。

「きゃー、やだ！　信じられない！　タマタマ弱いね！」

「弱いのよ。生意気な男子も、一回キ〇タマ蹴ってやればすぐおとなしくなるの。玉なんて潰れても治る時代なんだから、女はどんどん玉蹴りしていくべきなのよね」

　ナノテクが発達し、睾丸ぐらいなら数秒で治る薬がコンビニで買える時代である。

「えー、でも仕返しされないかなあ？」

「ん、ああ、そうねえ。同じようにお股蹴られちゃうねえ。それは怖いわ」

　パン、と自分の股間を叩く。

　父親が妹に食らったそれの何倍かわからない威力。

　しかし特に気にした様子もない。

「うううう」

「あは、パパまだ痛そう。私もう平気……というか初めから平気なんだけど」

「きゃはは、私も平気平気」

　パンパンとムニムニした肉の割れ目辺りを平手で叩くモモミ。

「あ」

「大丈夫大丈夫、私たちパパと違って金の玉付いてないから！　金の玉、ね？」

「そうだよー！　金の玉ないから平気！」

「女の股間は強いの、大丈夫。男の股間は最弱だけど。ね」

「大丈夫大丈夫」

　フラットな股間を突き出してくる娘二人。

　思わず見入りつつ、やっと痛みがましになってきた、手の中の肉玉を揉む。

　――この子らパンパン平気で……そりゃ玉がないから頑丈なのはわかってたけど、ここまで平気で叩けるなんて、俺には絶対無理。だって玉ついてるし……

　と、風呂の戸が開く。

「そろそろ夕飯ですよ。あら、どうしたのあなた？」

「あ、その……」

「モモミがパパの大事なところをぺしって」

「蚊を叩こうとして、当たっちゃった」

「あら。ぷっ、そんなことでそんな恰好に？　男の人って大変よねー」

「ねー」

「ねー」

「私たち、付いてなくてよかったねー」
「ねー」
「ねー」
　急所痛の中、妻や娘に見下ろされ、唇を噛んでいるしかない藤枝。
　苦痛、屈辱。
　しかし、ギン立ちしそうなのもまた事実である。
　――耐えるんだ、ここで立ったら何言われるかわかんねーんだから！
　何とか耐え抜く。

体験版終わり

この後タガが外れたように妻子らは夫・父に金責めしまくります。

好きだからこそ反応が面白くて玉責めしまくるという方向性に怒るに怒れない主人公。

さらに玉責めの中、妻がドＳ覚醒し、夫をドＭであることにしようと追い込んできます。

続きは製品版でお楽しみください